

# 町民文芸



## 只見短歌会 一月詠草

大塚栄一 指導

元日も休まず透析行はれ常と変わらず夫送り出す

古川 英子

岩盤を洗ふごと競ひゆく水の激しき流れに目まひを覚ゆ

小倉キミ子

老人の新年会の余興などで婦人部員の話賑はふ

関谷登美子

古い母とクイズ番組見てをれば我より正解の確率高し

新国由紀子

子の入試近づく娘は正月の挨拶もそこそこに閑はりをらむ

馬場 八智

豪雪の只見は寒に入り雪降らず土手に萌え出でし路の臺摘む

渡部ゆき子

冷ゆる夜に孫見送れば自動車の排気ガス吐く温みが残る

目黒 富子

大晦日にかつて使ひしお平椀膳と並べて過ぎし日思ふ

渡部ヨリ子

二歳児となりし曾孫が保育所に通ひはじめて日ごと知恵づく

新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会 二月例会

目黒十一 指導

保育児の一心に見る歌留多かな

都

初髪を重ね行く母肩薄し

初春や遠見に眼あそばせて

礼

年経しも海を詩えぬこの弥生

洋子

ドア閉まる音の激しき春嵐

逝く友へ弔辞を捧ぐ寒波の日

修一

兄いもうと二つちがいの柚子湯かな

浩子

初暦富士の山より始まりぬ

言えなくて手にした筆に春の風

一穂

入選し知らせもらいし冬の朝

味代子

ずずずと落ちる雪を見届ける

白寿祝ふ孫の尺玉雪祭

吉児

春立つやひときわポスト色増して

恒夫

節分や一人が播いて妻拾い

豆まくや去年も今年も鬼はいず

信